

令和4年度 現職研修助成事業研修概要

「課題への見通しをもち、自ら学ぶ児童の育成」 ～読解力を高める指導を通して～

萩市立育英小学校

1 主題設定の理由

(1) 今日の教育課題から

今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、Society5.0時代の到来によるグローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、急速に変化しており、未来への予想が困難な時代と言える。

このような時代にあって、学校教育には、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築できるようになることが求められている。

そのためには、「課題への見通しをもち、自ら学ぶ児童の育成」が必要であると考え。「課題への見通しをもち、自ら学ぶ児童」の姿とは、課題解決に向けた自分の思いや願いをもち、進んで解決しようとする姿、困難な課題にもあきらめずに挑戦しようとする姿、ゴールをイメージしながら解決しようとする姿のことである。

こうした姿勢を身に付けることで、新型コロナウイルスやインフルエンザ等の感染拡大により学校閉鎖・学級閉鎖になった場合や、今後複式学級化が進み、異学年が同学級で学ぶことになるなどの急な環境の変化に直面しても、教師の指示を待ったり、学びが止まったりすることなく、課題に対して自らの力で学び続けていくことができると考える。

(2) これまでの研究と児童の実態から

本校では昨年度、「課題への見通しをもち、自ら学ぶ児童の育成～複式学習から学ぶ「一人学び」と「共学び」の支援の在り方～」という研究主題で研修を行った。「一人学びや共学びで何をするのか教師も児童も明確になってきた。」「単元の見通しをもって学習する児童の様子も見られた。」などの意見が挙がり、研究主題に迫ったことを実感できた。しかし、活動の見通しはもてても、その先の一人学びでつまづく児童が多いことも課題として挙げられた。その背景には課題や問題、文章などを正確に読み解く力の弱さが考えられる。

そこで、今年度は、昨年度の成果と課題から、問題を読み解く力を育てることが必要であると考え。「読み解く力」とは、文章を読んで内容を理解し解釈する力、図表が意味することを正確に捉える力、他者とのコミュニケーションの中で相手の置かれている状況や感情、伝えたいことを把握し、理解する力である。今年度はその中でも特に、文章を読んで内容を理解し、解釈する力、すなわち国語科における読解力を高める授業をめざしていきたい。授業の中で、内容を読解するために必要な情報を得たり、語彙力を獲得したりするために児童一人ひとりがICTを効果的に活用できる力を付けたい。自分にとって必要な情報は何かを考え、選択し、取得することも、自ら学ぶ児童を育成する上では大切なのではないだろうか。

そうした考えのもと、読解力を高める指導を通して、自分の力で課題を読み解き、自分が知りたい情報は何かを把握し、それを知るために書籍やICTを効果的に活用し、自らの力で課題解決できる児童の育成をめざすことができるのではないかと考える。

2 研究の内容

これまでの経緯から、以下（１）（２）（３）の３つの共通視点をもって授業実践を積み重ねてきた。

（１）児童が学習課題を主体的に捉え、自分の考えをもてるようになるための導入の工夫

- ・ゴールをイメージすることができるようなめあてや学習課題の設定

（２）「学び方ガイド」の作成とそれを活用した授業実践

- ・児童が自らの力で読解していくための道しるべとなるガイドの作成
- ・単元を通してどのようにガイドを活用して学びを深めるかの検証

（３）語彙力を高めるための工夫

- ・ICTなどの活用
- ・言語活動の充実
- ・身近な体験を通して

3 研究の実際

今年度は、「学び方ガイド」を作成するという大きな柱となる活動もあったため、指導案検討会などの時間を削減するために、講師を招聘する研究授業は６年生（６月）、３、４年生（１１月）、１年生（２月）の３回とした。しかし、他の学級においても公開授業をしており、授業後の振り返りも行った。どの学級においても、上記の３点をしっかり意識しながら授業を行うことができた。以下、講師を招聘した研究授業についてのみ紹介する。

（１）６月２９日（水）第１回研究授業

第６学年 国語科「笑うから楽しい」「時計の時間と心の時間」 授業者 坂本 日向子

年度当初、第１回目ということもあり、今年度の研究のしるべとなる提案ということで、教材研究や指導案検討を含めた事前準備を念入りに行っての授業提案となった。

「学び方ガイド」がまだ試作に入ったばかりの段階での授業だったが、「国語の武器」と称した補助的なガイドも作成し、「学び方ガイド」と併せて提示したことで、児童は見通しをもって、説明文を読み解き、筆者の主張を捉えることができた。

研究協議後の受指導では、講師に、萩市立大井小中学校の岡田 淳 教頭先生をお招きし、「国語科での学びのサイクル」についてご講話いただいた。国語科においては、インプット（関わる）・アウトプット（表現する）・リフレクション（振り返る）の３つが、うまくサイクルしていくことが大切であることを学ぶことができ、今一度、自身の日々の授業を振り返り、問い直すきっかけとなった。児童に読解力を付けるためには、リフレクション（授業の中で刻々と行われる「立ち止まり」や「立ち返り」を含む機能としての振り返り）が重要であることを改めて考えることができた。



(2) 10月19日(水) 第3回研究授業

第3学年 国語科「すがたをかえる大豆」「食べ物のひみつを教えます」

第4学年 国語科「世界にはほこる和紙」「伝統工芸のよさを伝えよう」 授業者 中村 友之

第3・4学年は、本校唯一の複式学級である。今年度作成した「学び方ガイド」で、単元の流れ、本時の流れを確認したら、それぞれの学年のリーダーを中心に、次は複式学習のための「学習ガイド」をもとに自分たちの力で学習を進めていき、一人ひとりがしっかり見通しをもって主体的に学習している姿が見られた。3年生は、導入や一人学びの場面で効果的にICTを活用することで、学習課題がイメージしやすくなり、自分の思考を整理したり表現したりすることに大きく役立っていた。4年生は、ヒントカードの提示により、児童の思考がぶれたり、それたりすることなく、筆者の挙げた事例の役割を考えることができた。教師は、どこで直接指導をするべきなのか、間接指導で児童に任せながら個別の支援にあたるどころはどこなのかを全員で考える機会となった。

研究協議後の受指導では、萩市教育委員会 複式学習指導員の三輪 みゆき先生をお招きし、本校児童の課題である「読解力」をいつ、どのように付けるのかを教授いただいた。SNSの普及、新聞離れ、読書習慣の減少などにより、長文に触れる機会が減少していることが読解力低下に大きく影響している。だからこそ、ただむやみに読書をさせるのではなく、本を読み、アウトプットする習慣が大切であることを再認識した。さらに、文章を理解するために必要なのは、豊富な語彙力、大まかな内容が把握できる要約力あることも再認識し、今後の学習活動の方向性も示唆していただき、全教職員で共通理解することができた。



(3) 2月2日(木) 第5回研究授業

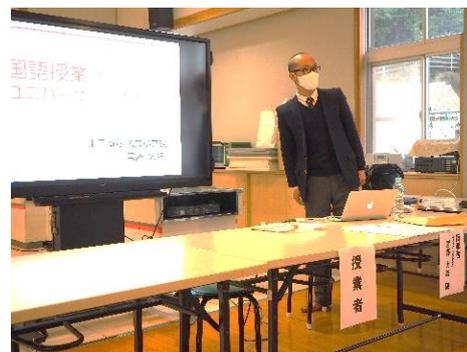
第1学年 国語科 「たぬきの糸車」 授業者 長岡 知美

第1回研究授業で坂本先生が作成・活用を試みた「国語の武器」と、第3回研究授業で中村先生が日々の複式学習のために作成し、活用している「学習ガイド」を「学び方ガイド」の中に集約できないかを試行錯誤しながらの授業であった。今後の複式学級を見越し、スムーズに自分たちで学習が進められるような手立ての一つに「学び方ガイド」が効果的に活用できることを認識することができた。まだ今後、さらによりよいものにしていきたい。



また、低学年は児童の興味を引き付ける導入の工夫も重要であるが、本時のように毎時間の学習内容がパターン化されていることで、児童は何をすればよいのかの流れが把握できており、学習の最後までを見通し、安心して授業に臨むことができると感じた。学習課題を主体的に捉えるための手立てとして、学習内容をパターン化することも一つの有効な方法であることが認識できた。

研究協議後の受指導では、講師に山口市立大歳小学校の宮野 大輔先生をお招きして、「国語授業のユニバーサルデザイン」についてご講話いただいた。授業のユニバーサルデザインとは、困り感をもつ児童に寄り添うことであり、個別の配慮も必要だが、まずそれ以前に授業の工夫をすることが重要であることを教えていただいた。宮野先生は、ご自身の学級においても「国語科授業のユニバーサルデザイン」の一つとして、「考える音読」を実践しておられる。テンマル読み、ダウト読み、ぼく読みなど児童の思考を揺さぶる音読の在り方を教授いただいた。実際に教職員でダウト読みに取り組んでみると、教師側が意図的に着目させたい言葉を児童と共有することができるということを認識できた。今後の学習に生かし、児童と楽しく「考える音読」に取り組み、読解力の向上につなげていきたい。



(4) ICT機器の活用について

夏休みに萩市立須佐中学校の伊達 千絵先生をお招きして、「スクールワーク」の基本的な操作方法や効果的な活用についてご講話いただいた。また、2学期には、授業支援クラウド「ロイロノート」の基本的操作の研修を行い、その後はどの学級においても「ロイロノート」を活用した学習を行っている。今後も研修を深め、効果的な活用方法を模索していきたい。その他にも、「キーノート」における共有ノートの作成や活用の方法、Google「ジャムボード」における授業実践事例の紹介などの研修も行い、少しずつだが、ICTの効果的な活用への見通しがもてるようになってきた。しかし、語彙力を高めるための効果的な活用にまでは至っておらず課題が残る。



また、前年度に続き、今回の事業で購入したAppleTVを全ての学級に導入できたことで、ワイヤレス環境で瞬時に各端末が画面に提示できるようになり、ケーブル差し替えによる学びの流れを止めることなく学習が進められるという大きなメリットを得ることができた。

4 研究のまとめ～今後の課題

今年度の校内研修において、「学び方ガイド」を作成したことで、研究主題「課題への見通しをもち、自ら学ぶ児童の育成」の達成に大きく前進することができた。今はまだ模索の段階ではあるが、児童が「学び方ガイド」を見ることで、家庭学習においても、複式学習においても学びの手を止めることなく学習に向かうことができると確信した。今後、さらによりよいものへ上げていきたい。

一方で、この1年間研修を重ねてきて、本校の課題である読解力向上に向けて、まだまだ課題が多いことを感じている。いろいろな講師の先生方にご示唆いただいたことを、来年度は今一度精選し、取り組み課題を絞った上で、教職員一同が一丸となって実践していきたいと考えている。